

【教育講演】

「進化する Interventional EUS ～より安全な手技を目指して～」

講師 唐津赤十字病院
第1内科 副部長 宮原 貢一
座長 JCHO諫早総合病院
消化器内科 部長 森崎 智仁

超音波内視鏡（Endoscopic ultrasonography:EUS）は、当初観察のみに用いられてきたが、2010年に超音波内視鏡下穿刺吸引法（EUS-guided fine-needle aspiration biopsy:EUS-FNA）が保険収載されたことをきっかけに、急速な発展を遂げた。

診断においてはEUS-FNAを行うことにより、膵臓、消化管膜下腫瘍、副腎、腹腔内リンパ節など、これまでは組織の採取が困難であった部位も確定診断が可能となった。特に膵臓においては、がん遺伝子パネル検査の普及も相まって必要不可欠な検査となっている。また消化器領域に留まらず、縦隔病変などの診断でもEUS-FNAが果たす役割は大きい。

治療においても、Therapeutic Interventional EUSと総称される様々な治療手技が登場している。Therapeutic Interventional EUSは、大きく2つに分類されるが、1つはドレナージを目的とした手技群、もう1つは薬剤などを注入するのが目的の手技群である。ドレナージを目的とした手技群には、EUSガイド下胆嚢/胆管ドレナージ術、EUSガイド下膵管ドレナージ術、EUSガイド下胃空腸バイパス術など従来では考えられなかったような治療法が開発されている。

以上のようにInterventional EUSは急速に飛躍・発展してきたが、それゆえに専門医以外にはあまり周知されていない。Interventional EUSで行える事が消化器内科領域に留まらないことを考慮すると、多くの医療者にInterventional EUSに関して情報を発信していくことは重要な課題と言える。

また、Interventional EUSの実施に際しては、必要な知識や技術・道具が多岐にわたることから、医師・看護師・内視鏡技師間で綿密な連携が必要となる。そこで今回、Interventional EUSの現状や課題を概説すると共に、より安全に実施するための取り組みを様々な視点から考察する。